

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520558

研究課題名(和文)人情本を資料とした現代東京語成立に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basic study on modern Tokyo dialect establishment that depend on the Ninjobon document.

研究代表者

浅川 哲也 (ASAKAWA, Tetsuya)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：50433173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、為永春水が江戸幕府に処罰された天保13年(1842年)から明治初年(1868年)に至るまでの約30年間に発行された春水以降の人情本を「江戸時代末期人情本」と位置づけ、その主要な7作品の全文の正確なテキスト化作業を行い、その成果を公刊したものである。その過程で、江戸時代末期人情本のこれまでの活字化資料が学術的な調査に耐えられる正確な活字テキストではないことを明らかにした。また、江戸時代末期人情本として最も著名な『春色恋洒染分解』の語彙コーパスを作成しこれを公刊した。

この基礎的な研究を通じて、後期江戸語から現代東京語にかけての口語の運用の実態について語法・語彙の観点から明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study placed the love story called “Ninjobon” done a block for approximately 30 years before (1842) reaching it in (1868) in the Meiji early years for Tempō era 13 years when Shunsui TAMENAGA was punished by the Edo Shogun ate as “an Edo era last years Ninjobon”. A precise text of the whole sentence of 7 main works worked and published the result. In the process, a document clarified that it was not the correct printing type text which could tolerate a scientific investigation the conventional printing type of the terminal “Ninjobon” in the Edo era. In addition, we made a vocabulary corpus of best-known “Syunsyoku-Koinosomewake.” as a terminal “Ninjobon” in the Edo era and published this.

Through this basic study, we clarified it from the viewpoint of usage, vocabulary about the actual situation of the use of the spoken language from late Edo word to a modern Tokyo dialect.

研究分野：日本語学

キーワード：人情本 後期江戸語 明治東京語 山々亭有人 松亭金水 人情本刊行会 です

1. 研究開始当初の背景

(1)江戸時代後期の戯作文学のひとつである人情本は、地の文を除いては、全編が登場人物たちの会話文から成り立っており、また、一般的な上層町人の男女が登場人物であることから、当時の江戸上層町人の話し言葉の実態をうかがい知ることのできる貴重な言語資料と評価されてきた。人情本刊行の最盛期は、天保年間(1830~1843年)の為永春水(1790~1844年)の活動期であるが、天保の改革による人情本弾圧政策によって、天保12年(1841年)に春水の執筆活動は停止した。しかし、この弾圧の後も、人情本は刊行され、幕末から明治初期にかけて多くの作品が出版されているのである。

(2)江戸時代末期の人情本作者としては、山々亭有人・松亭金水・梅暮里谷蛾らの名が挙げられるが、これら江戸戯作者の手になる人情本は、当時の江戸上層町人の俗語や口語を豊富に交えて記述されており、江戸後期以降の上層町人層の口語を直接反映する資料とされている。江戸上層町人層の口語は、江戸期教養層の言語と同様に、現代日本人の我々が一般に使用している「共通語」に直接つながる言語のひとつと考えられている。これまでの東京語・共通語の成立論は、「江戸語 東京語 共通語」という架空の図式を描いて、江戸語から東京語が生まれ、東京語から共通語が生まれたという前提に立ち、その証明に努力を重ねてきたが、東京語と共通語とは、先後関係を直線で結ぶこと自体が不可能である。東京語と共通語とはほぼ時を同じくして成立したと考えられ、一本の言語的な連続線としては「抄物 江戸講義物 明治講義物 演説 共通語」とする経路の説が有力になってきた(森岡健二氏「口語史における心学道話の位置」『国語学』123号、1980年)。

(3)しかし、話し言葉としての後期江戸語から現代東京語への推移をつなぐ経路としては、もうひとつの線が考えられる。それが、幕末・明治期の人情本資料に現れている一般の男女たちによる会話文である。【図1】に示すように、後期江戸語の話し言葉と、明治時代以降に成立した東京語の話し言葉との架け橋が、幕末・明治期の人情本資料である。人情本資料は言語史的な経路をつなぐ重要な資料と考えられる。江戸時代末期から明治時代初期の人情本資料が、新たな日本語史論の記述において重要な点は、江戸上層町人層による会話体すなわち口語の文体が、後代の東京語の形成および現代の共通語の形成に

【図1】日本語史と方言史との関係



大きな影響を与えているということである。江戸末期の人情本の研究は、共通語成立史という日本語史の重要な側面を明らかにしていくための、重大な手がかりのひとつとなる研究である。

2. 研究の目的

(1)天保年間の為永春水以降に出版された人情本を江戸時代末期人情本として位置づけ、その人情本資料のテキストに関する研究基盤を作ることを目的とする。

(2)江戸時代末期から明治時代初期にかけて刊行された人情本資料のうち主要な作品の正確な本文テキストを作成し、その本文テキストに基づいて、後期江戸語・初期明治東京語の話し言葉の語彙コーパスを作成する。

(3)その話し言葉の語彙コーパスを分析し、音韻・語法・語彙・待遇表現などの観点から、後期江戸語より初期明治東京語にかけての推移の状況について解明し、現代東京語成立期の言語運用の実態を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)江戸時代末期人情本のうち主要な作品を優良な版本を底本として、その本文を忠実に活字化した正確なテキストを作成する。

(2)その本文テキストに基づいて話し言葉の語彙コーパスを作成する。

(3)江戸時代末期から明治時代初期にかけての江戸・東京の人々の話し言葉をコーパスに基づいて分析し、後期江戸語から明治東京語にかけての言語運用の実態と推移について、語法・語彙・音韻の観点から解明する。

4. 研究成果

(1)以下に挙げる人情本を、優良な版本を底本として、正確なテキストによる全文活字化作業を完成させた。また、そのすべての研究成果を大学院紀要・査読有学術雑誌等で公開した。

『春色恋廻染分解』(全五編・山々亭有人・万延元年・1860年に初編刊)

『毬唄三人娘』(全五編・松亭金水と山々亭有人の合作・文久2年・1862年に初編刊)

『春色江戸紫』(全三編・山々亭有人・元治元年・1864年に初編刊)

『花暦封じ文』(全四編・山々亭有人・慶応2年・1866年に初編刊)

『春色玉禪』(全三編・山々亭有人・安政3~4年頃・1856~1857年頃に初編刊)

『鶯塚千代廻初聲』(全四編・松亭金水と山々亭有人の合作・安政3年頃・1856年に初編刊)

『閑情未摘花』(全五編・松亭金水、天保

10年・1839年に初編刊)。

これまで、語学・文学の研究分野において、人情本の活字化資料として最も一般的に使用されてきたのが「人情本刊行会叢書」(大正5年・1916年)の人情本資料であった。しかし、本研究において、「人情本刊行会叢書」では版本の表記が他の表記に改変されていること、その改変された表記の中には、貴重な語彙資料や唐話(白話)語彙と見られる漢字語彙が豊富にあるということ、「人情本刊行会版」は版本にある性愛場面などの本文を意図的に削除・改変しておりテキストとしての完全性を欠いていること、などを明らかにした。これにより、「人情本刊行会叢書」(大正5年・1916年)や、「江戸軟派文学全集」(昭和2年・1927年)など、版本の不正確な活字化本しか存在しなかった江戸時代末期人情本のうち、その主要な作品を言語研究・文学研究の立場からみて十分に調査対象となりうる正確な本文のテキストとすることに成功した。また、従来おこなわれてきた不正確な活字化の原因のひとつは、大正～昭和初期当時の出版物検閲制度にあり、校訂編集者による意図的な版本のテキスト改変が常態化していたということを実証的に解明した。

(2)『春色恋廻染分解』(山々亭有人・万延元年・1860年に初編刊)の本文の全文活字化を完成させ、このテキストを典拠として、語彙のコーパスを作成した。この研究成果を総索引として、『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』(おうふう)で公開した。

(3)江戸時代末期の江戸語から、明治東京語にかけての言語変化として顕著なものに、丁寧語の「です」使用の一般化と普及が挙げられる。本研究では、「人情本刊行会叢書」で丁寧の助動詞「です」が動詞に接続する場合に、版本にない準体助詞「の」を補って版本の本文「あるです」を、「あるのです」と改変している例があったことを発見した。特に、江戸時代末期の人情本に「あるです」の語形があったということは、たいへん重要な時日である。このように、人情本の版本の全文を正確に活字化してみても初めて判明した事実があった。

(4)【表1】で示したように、江戸時代末期人情本の中でも、山々亭有人による「です」使用の実態は、他の人情本とは著しく様相を異にするものであり、「です」使用における後期江戸語と明治東京語との相違点が顕著であることがわかった。また、山々亭有人と松亭金水の文体の相違、漢語語彙における唐話(白話)語彙の使用状況の様相、『日本国語大辞典 第二版』中にある見出し語の初出用例を遡及する語彙使用例などについて、研究成果として公表した。

【表1 有人の人情本にある「です」の上接語】

	小計	その他	ません	副助詞	用形動詞・形容動詞・形容詞・動詞	動詞	副詞	助詞「の」	助詞「ん」	助詞「の」	形容動詞終結	代名詞	名詞			
	127			1			13	10	9	22	8	11	7	46	です(終止形)	『春色恋廻染分解』
	6								1					4	です(連体形)	初編～五編
合計	142					1	2							4	です(連体形)	1860～1865
	0														です(終止形)	『嵯峨三人娘』
	0														です(連体形)	初編～三編
合計	0														です(連体形)	1862～1865
	23						5		1	4	2	2		9	です(終止形)	『嵯峨三人娘』
	1													1	です(連体形)	四編～五編
合計	27		1											1	です(連体形)	1865
	33	1			1				3	4	2	4	1	17	です(終止形)	『春色江戸紫』
	0														です(連体形)	初編～三編
合計	34													1	です(連体形)	1864～1868
	62	2				1	3	5	6	15	6	7	6	11	です(終止形)	『花暦封じ文』
	1													1	です(連体形)	初編～四編
合計	73		2			1	1							3	です(連体形)	1866
	38						2	2	4	4	3	2	1	20	です(終止形)	『春色玉襷』
	2													1	です(連体形)	初編～三編
合計	45										1	1		2	です(連体形)	1856～1857
	1													1	です(連体形)	

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

浅川哲也、『閑情末摘花』四編～五編(翻刻)、人文学報、査読無、512号-7、2016、pp.1-90

浅川哲也、『閑情末摘花』初編～三編(翻刻)、新国学、査読有、復刊第7号、2015、pp.185-284

浅川哲也、『春色玉襷』初編～三編(翻刻)、人文学報、査読無、第503号、2015、pp.1-125

浅川哲也、『鶯塚千代廻初聲』初編～四編(翻刻)、新国学、査読有、復刊第6号、2014、pp.261-441

浅川哲也、江戸時代末期人情本の活字化資料にみられる諸問題 「あるのです」は「あるです」、日本語研究、査読有、第34号、2014、pp.1-14

浅川哲也、『花暦封じ文』初編～四編(翻刻)、人文学報、査読無、第488号、2014、pp.1-150

浅川哲也、日本語史における「現代語」とは何か 日本語史の時代区分についての一提言、都大論究、査読有、第50号、2013、pp.39-49

浅川哲也、『春色江戸紫』初編～三編(翻刻)、人文学報、査読無、第473号、2013、pp.1-108

浅川哲也、口語文法における「口語」とは何か 日本語文体史と口語文法との関係、新国学、査読有、復刊第4号、2012、pp.117-134

浅川哲也、『毬唄三人娘』四編～五編（翻刻）人文学報、査読無、第458号、2012、pp.35-111

浅川哲也、『毬唄三人娘』初編～三編（翻刻）人文学報、査読無、第443号、2011、pp.1-118

〔学会発表〕(計3件)

浅川哲也、江戸時代末期人情本の活字化資料にみられる諸問題—「あるのです」は「あるです」—、日本語学会2013年度秋季大会、2013年10月27日、静岡大学（静岡県・静岡市）

浅川哲也、幕末期人情本にみられる語法上の特徴、國學院大學院友學術振興会後期総会、2013年2月2日、院友会館（東京都・渋谷区）

浅川哲也、幕末期人情本『春色恋廻染分解』の本文について、國學院大學院友學術振興会前期総会、2011年6月11日、院友会館（東京都・渋谷区）

〔図書〕(計1件)

浅川哲也、おうふう、春色恋廻染分解翻刻と総索引、2012、434ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.tmu.ac.jp/stafflist/data/a/227.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅川 哲也 (ASAKAWA, Tetsuya)

首都大学東京・人文科学研究科・教授  
研究者番号：50433173

(2) 研究分担者  
なし

研究者番号：

(3) 連携研究者  
なし

研究者番号：